



## 十五 ゴールは続くよ、どこまでも？

やっと、やっとだ。やっと競技場の入出場口に戻って来た。一步踏み出すごとの股関節の痛みと足の裏の豆の痛みの苛まされながらも、直人はゴールまで後四百メートルまでやってきた。

「後、トラック一周だ。頑張れ、直人」「がんばるのよ。直人君」

どすの利いた低い声と甲高い明るい声が左顔面にぶつかった。頭はぼおっとしていたが、その声の持ち主はわかった。

「せんぱい」かろうじて声を出す直人。芝生の上では、荒木先輩が仁王立ちで、中山先輩は座ってストレッチをしながら、応援してくれていた。

「ダッシュだ。百メートルを四回走れ」

「よんひゃくめーとる越えよ」

二人の先輩から異なる声援だ。どちらも正しい。でも、直人の気持ちも体もついていかない。頭を前後に振り、振り子運動で走る。手足はばらばらになったり、阿波踊りのように右手と右足が同時に出たりと、空中分解寸前だ。それでも、なんとか、中山先輩の言いつけどおり「さんひゃくめーとる越え〜」、「にひゃくめーとる越え〜」、「ひゃくめーとる越え〜」と叫びながら走る。残り直線百メートル。ゴールの横断幕が両目のレンズに大きく映し出される。そして、その目は女子高校生がゴールテープを持ってのを目ざとく見つける。女子高校生。その姿とその言葉の響きだけで、直人の足は大きくストライドを伸ばす。彼女たちの前で、悲惨な姿はみせたくない。やせ我慢のプライドが、直人の心に火を点けた。

「そうだ、いけいけ。鼻の差、胸の差で勝て」荒木先輩がゴール前で叫んでいる。

「舌を出してもいいのよ。先にゴールした方が勝ちよ」と中山先輩はその場で飛び跳ねている。

直人は、荒木先輩や中山先輩は一体何の事を言っているんだと訝しむ。俺は馬じゃないんだ。だが、ふと、横を見ると、直人と同じくらいの年齢のランナーが最後の力を振り絞ってか、スピードを上げ始めている。そんなに力が残っているんだったら、ゴールの前じゃなく、十キロ前から力をだせよ。と思いながらも、こいつも俺と同じように女子高校生の前でかっこうをつけたいんだ、と気づく。これまで四十二・〇九五キロの距離に負け続けてきたが、残り百メートルで、隣のランナー対して急に負けん気が働く。直人は先にラスパートを仕掛けた。

相手もそれに気付いてか、スピードを上げ始めた。くそ。この野郎。相手には聞こえないように頭の中で叫びながら、直人もスピードを更に上げる。ほぼ並んだまま、よれよれ同士の男二人がゴールに向かう。後、十メートル。五メートル。一メートル。ゴール。ほぼ同時のゴール。直人は背中を曲げ、両手を両ひざの上に付く。隣の相手の姿は見えない。どちらが勝ったのか。だが、そんなことよりも息が苦しい。

ぜえぜえぜえぜえ。えぜえぜえぜえぜ。ぜえなのか、えぜなのか分からないくらい激しい呼吸音だ。どちらの音にしろ、酸素が足りないのだ。思い切り息を吸い込み、思い切り息を吐く。息を吐けばほっといても息は吸えるけれど、今、この状態であれば、そんな悠長なことは言ってはられない。とにかく、息を吐き、息を吸う。呼吸のダッシュを繰り返す。

マラソンコースの途中からは、足などの痛みなどでスピードを出せなかったのに、最後の百メー

トルだけは全速力で走ったので、これまでのゆったりムードに心臓と肺が驚いてついていけなかったのだ。足下のトラックに水滴が落ち続ける。額からの汗だ。右手で汗を拭う。拭っても拭っても汗は吹き出す。その時、その背中にバスタオルが被せられた。

「おつかれさまです。後ろの人がゴールしますので、前に進んでください」

女子高校生の声だった。バスタオルは完走賞の証。ようやく顔を上げる直人。ゴールの後ろには両側に女子高校生たちが一列に並んでいる。完走したランナーたちが女子高校生たちとハイタッチをしている。左側を見る。直人とほぼ同時にゴールした相手が疲れが吹き飛んだような顔をして左側に整列した女子高校生たちとハイタッチをしている。負けるものか。直人もマラソンなんかたいしたことはないよといった顔をして右側に並んだ女子高校生たちとハイタッチをしばじめた。顔がほころぶ。ようやく女子高校生のハイタッチの列が終わると、そこには、ゴリラとひまわり娘が立っていた。

「いやに、最後だけ元気じゃないか」荒木先輩の顔がにやりと崩れた。

「もう。相変わらず、元気じゃなく、げんきなんだから」中山先輩があきれている。

「いやあ。最後よければ、全てよしですから。ああ、疲れた」直人はにやついた顔を無理矢理に疲れ切った顔に修正する。

「それも言うなら、はじめよければ、終わりよしよ。何、とぼけているの」中山先輩は腰に両手を着いている。

「それだけ元気なんだから、帰りはお前が車の運転をしろよ」

「そうよ。あたしたちの応援よりも女子高校生とのハイタッチの方が元気が出るんでしょう」

全て見抜かれていた。さすが海千山千の先輩たちだ。直人は黙ったまま目を地面に落とす。次の言葉が、言い訳の言葉が出てこない。

「さあ、帰るぞ。着いて来られないなら、走って帰れ」

「そうよ。女子高校生とハイタッチしながらでも走りなさい」

二人の先輩が後ろも見ずにさっさと歩き出す。

「ちよっ、ちよっ、待ってくださいよ。荒木先輩に中山先輩。もうこれ以上走れません。車の運転は僕がしますから、待ってくださいよ」直人は足をひきずりながら黄色とピンクの背中を追い掛ける。多分、一生、この二人の背中を追い越すことはできないと確信しながら。